

Title	<翻訳> ガーリーブ詩集(Ⅰ)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.83-p.97
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81223">https://hdl.handle.net/11094/81223</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ガ ー リ ブ 詩 集 (I)

松 村 耕 光・訳

本稿は、古典ガザル (ghazal 定型抒情詩) 時代の最後を飾る詩人ミルザー・アサドゥッラー・カーン・ガーリブ (Mirzā Asadullāh Khān Ghālib 1797-1869) のウルドゥー・ガザル17篇の翻訳である。底本としては下記のものを用いた。

Hāmid 'Alī Khān (ed.), *Dīwān-e Ghālib*, Punjab University, Lahore, 1969.

尚、17篇のガザルの冒頭の半句は以下の通りである。

- (1) Naqsh faryādī hai kis ki shōkhī-e taḥrīr kā
- (2) Kahtē ho nah dēngē ham, dil agar parā pāyā
- (3) Satā'ish-gar hai zāhid is qadar jis bāgh-e riẓwān kā
- (4) Bas keh dushwār hai har kām kā āsān hōnā
- (5) Dōst ghamkhwārī meṇ mērī sa'ī farmā'engē kyā
- (6) Yeh nah thī hamārī qismat keh wisāl-e yār hōtā
- (7) Hawas ko hai nashāt-e kār kyā kyā
- (8) Gilah hai shauq ko dil meṇ bhī tangī-e jā kā
- (9) Phir mujhē dīdah-e tar yād āyā
- (10) Huī tākhīr to kuchch bā'ith-e tākhīr bhī thā
- (11) 'Arz-e niyāz-e 'ishq ke qābil nahīn rahā
- (12) Dhikr us parī-wash kā, aur phir bayān apnā
- (13) 'Ishrat-e qatraḥ hai daryā meṇ fanā hō jānā
- (14) Āh ko chāhiye ik 'umar athar hōtē tak
- (15) Sab kahān, kuchch lālah-o-gul meṇ numāyān hō ga'īn
- (16) Dil hī to hai, nah sang-o-khisht, dard se bhar nah ā'ē kyōn
- (17) Kisī ko dē ke dil kō'ī nawā sanj-e fughān kyōn ho

(1)

この画は告訴人なのか、一体誰の絵筆の気紛れの  
紙製なのだ、衣は、どの画の人も<sup>1)</sup>

孤独の命を削る苦しみ——それを問うてはならぬ  
夕を朝とするのは、乳の河を引いて来ること<sup>2)</sup>  
願望のこの押え切れない引力を見るが良い  
剣の胸から外へ出て来ているのだ、剣の息（刃）は<sup>3)</sup>  
理性が如何に審問の網を広げようと  
意味は幻の鳥なのだ、私の言葉の世界の  
ガーリブよ、捕われの身にあっても足の下には火  
焼け縮れた毛に過ぎないのだ、我が足の鎖は<sup>4)</sup>

（2）

おっしゃるのですね、「返しませんよ、（あなたの）心をもし見つけても」と  
失うような心など何処にあるのでしょうか、私は意味を理解したのです<sup>5)</sup>  
恋のおかげで心は人生の喜びを得たのです  
苦しみの薬を得、薬のない苦しみを得たのです  
我が敵（恋人）の味方なのです、分りました、この心の信頼度がどの程度のものか  
溜息が無力なのを見、泣き声が届かないのを知ったのです<sup>6)</sup>  
単純にして複雑、不注意にして注意深い  
あの佳人が素知らぬ顔で恋の勇気を試すのを知ったのです  
蕾が再び開き始め、今日、私は自分の心が  
血に染められているのを見、盗まれているのを知ったのです  
心の様子など分りません、でも、これだけは何とか（分っているのです）  
私は何度も探し、あなたは何度も見つけたのです  
説教者の訓戒の嵐は傷に塩を振り掛けました  
あの御方（説教者）に誰か聞けば良いのです、「何の面白味があったのですか」と

（3）

禁欲の徒があれ程称賛している天の花園などというものは  
我々酩酊の徒が棚に置き忘れた一束の花に過ぎないのだ  
何と言うべきか、睫毛の刺し貫く苦しみを  
血の一滴一滴が赤珊瑚の数珠玉となったのだ<sup>7)</sup>  
あの殺人者（恋人）の威光ですら私の泣き声を止められなかった  
（私が）口にくわえた薬は葦原の根となったのだ<sup>8)</sup>  
素晴らしい光景を見せるだろう、もしも時が猶予を与えてくれたなら

私の心の傷一つ一つが輝く糸杉の種子なのだ<sup>9)</sup>  
 鏡の間に絵を描き出したのだ、お前の輝きは  
 太陽の輝きが露の原に作り出すような  
 この身の内に潜んでいるのだ、破滅への道が  
 刈り取られた麦を焼く雷の正体は農民の熱させられた血液なのだ<sup>10)</sup>  
 生き茂っているのだ、我が家の至る所に雑草が——その荒廃振りを見よ  
 仕事は今や雑草を抜くことなのだ、我が門番の  
 沈黙の中に潜むのは血と消えた幾多<sup>あまた</sup>の願い  
 燃え尽きた灯火<sup>あかり</sup>なのだ、私は、物言わぬ——無縁墓地の  
 未だに友（恋人）<sup>すがた</sup>の像の跡の輝きが一筋  
 この悲しみに塞ぐ心はまるでヨセフの牢獄の監房<sup>へや</sup>さながら  
 他の者の腕の中で、今日、お前は眠っているのだろう、さもなければ  
 他に何の理由があろうか、夢の中に現れて仄かな笑いを浮かべるような<sup>11)</sup>  
 誰が知ろう、どれだけ<sup>いかに</sup>の者の血が水（涙）となってしまったことか  
 世界最後の日だ、お前の睫毛が涙に濡れるのは  
 私の目には見えるのだ、死滅への道が、ガーリブよ  
 これこそ世界の散乱した断片<sup>かけら</sup>を結びつける糸なのだから

(4)

難しいものなのです、何事でも容易なものとなることは  
 人ですら得られないのです、人となることを  
 この涙は望んでいるのです、我が家の荒廃を  
 戸や壁から溢れ出るのは荒野の兆なのです  
 ああ、恋の狂気よ、いつも私は  
 あそこ（恋人の所）に我知らず行き、そして我知らず驚くのです  
 輝く姿は見られることを求めるので  
 鏡の研ぎ跡ですら睫毛になろうとするのです<sup>12)</sup>  
 刑場に立つ恋情の志士の喜び——それを問うてはなりません  
 （彼らの）目の祝祭<sup>イード</sup>なのです、剣が抜かれるのは<sup>13)</sup>  
 土の中に去ったのです、私は、幸福への（叶わぬ）願いの傷と共に  
 あなたは残り、そして咲き乱れる花園となるのです  
 心の破片<sup>かけら</sup>の喜びとは願望の傷を負うこと  
 肝臓の傷の喜びとは塩壺に浸ることなのです<sup>14)</sup>

私を殺した後であの人はその仕打ちを悔いたのです

ああ、あの余りにも早く後悔してしまった人の後悔！

ああ、あの4ギラの布の運命は憐れなのです、ガーリブよ！

恋する者の襟元となる布の運命は<sup>15)</sup>

（5）

友人達には私を慰めるために一体何が出来るのでしょうか

（掻き）傷が塞がるまでに爪が伸びないのでしょうか<sup>16)</sup>

（あなたの）無関心さはもう限度を超えています、主よ、一体何時まで

私が心の丈を訴えようとするとあなたはこうおっしゃるつもりなのですか、「何なのでしょうか」

説教者の方がいらっしゃるというのなら、謹んでお迎えするでしょうが

誰か私に教えて下さい、一体何を説教しようのでしょうか

今日はあそこ（恋人の所）へ剣と経帳子を持って行くのです、私は

私を殺さないでこうという、今度は一体どんな言い訳をするのでしょうか<sup>17)</sup>

もし説教者が私を投獄したとしても、それもまた良いでしょう

この恋の狂気の症状が消えるとでもいうのでしょうか

（あの人の）巻毛の生まれながらの奴隷なのです、鎖からどうして逃げ出したりするでしょう

忠節心の虜なのです、牢獄を恐れたりするのでしょうか<sup>18)</sup>

今、この町は愛の悲嘆の飢饉なのです、アサドよ

デリーに住むとしても、一体何を食えば良いのでしょうか<sup>19)</sup>

（6）

あの友<sup>ひと</sup>とは結ばれないのが私の運命なのであった

たとえ生き長らえていたとしても、待ち続けなければならなかったのであった

お前の（逢瀬の）約束を聞いてすら生き延びたなら、信用しなかったのだと知るが良い

喜びの余り死ななかったであろうか、もし信用していたなら

お前のか細さから判断したのだった、（お前は）弱々しい約束をしたのだと

破る事が出来ただろうか、もし約束が固かったならば

誰か私の心に聞いてみよ、お前が半分の力で放った矢のことを

この疼きが得られただろうか、もし肝臓を貫通していたなら<sup>20)</sup>

これは如何なる友情か、友は皆説教者となった

誰か癒してくれる者がいたなら、誰か同情してくれる者がいたなら  
 石の血管から止まることのない血が流れ出たことだろう  
 哀しみとお前が見倣しているもの——それがもし火花であったなら<sup>21)</sup>  
 哀しみは命を奪うもの、だが、何処へ逃げられよう、心があるというのに  
 もし恋の哀しみがなければ、俗世間の哀しみがあるだけのこと  
 誰に言えば良いのか、私は、悲嘆の夜が何であるか、それは全くひどいもの  
 死ぬのが何であったろう、もし一度だけだったなら<sup>22)</sup>  
 死後生じた我が汚名、何故海で死ななかったのか  
 葬列の必要もなければ、墓も残らなかったであろうに<sup>23)</sup>  
 彼の者（神）を誰が見ることが出来るだろう、唯一にして無比なのに  
 双子の可能性でもあれば、見られたかも知れないが  
 この神秘主義の諸問題、お前の雄弁、ガーリブよ  
 お前を聖者と見倣したろうに、もし酒飲みでなかったならば

(7)

願望には如何に多くの行動への意欲があることか  
 死ぬことがなければ生きる喜びなどあるだろうか  
 その素知らぬ素振りの目的は何なのか  
 一体何時まで、おお、全身魅惑の人よ、「何なのですか？ 何なのですか？」<sup>24)</sup>  
 （恋敵への）不当な恩寵を私は見る  
 （私の）色鮮やかな訴えをどうして嫌がるのか  
 真っ直ぐな視線が欲しいのだ  
 忍耐力を試そうとの素知らぬ素振りなのか  
 草の炎の輝きは一瞬  
 （恋敵達の）欲望は貞節の名誉を重んじようか  
 （私の）息は酩酊の大海の波浪  
 酌人の無関心を嘆く必要があろうか<sup>25)</sup>  
 衣服の香りに我慢出来ない  
 そよ風の彷徨に何の悲しみがあろうか<sup>26)</sup>  
 水滴一つ一つの心が「我は大海なり」の楽器  
 私はあの御方（神）のもの、私に何を聞くことがあろうか  
 何を恐れる、私が保証人、こちらを見よ  
 眼差しの殉教者に血の代償など要るだろうか

聞け、貞節の商品を荒す者よ、聞け  
心の価格の下落する音は何か  
一体誰が主張したろうか、忍耐力があるなどと  
恋する者の心の忍耐力など一体どれ程のものか  
殺人者（恋人）よ、この忍耐力を試す約束は<sup>なにゆえ</sup>何故なのだ  
異教徒（恋人）よ、この力を奪う誘惑は何物なのか  
生命の災い<sup>いのち</sup>なのだ、ガーリブよ、あの人のどの言葉も  
書かれていようが、仄めかされていようが、態度に示されていようが

（8）

不満があるのです、情熱には、心の中ですら場所の狭さの  
真珠の中に収められてしまったのです、大海の嵐は  
知ってはいるのです、あなたが手紙の返事など  
しかし、苛まれているのです、筆を走らせたいという思いに  
秋の足の指<sup>ヘンナ</sup>申花染料なのです、春というものは、もし春があるとするなら<sup>27)</sup>  
心の断えざる苦しみなのです、この世の悦びなどは  
別離に悲しむ私を花園に誘わないで下さい  
耐えられないのです、（花々の）無意味な高笑いには  
それでもあの佳人<sup>ひと</sup>（神）の親しい友となるのを渴望せざるを得ないのです  
毛根一つ一つが鋭い目の働きをしてくれているのですが  
心をあの人に、魅惑されるより先に、与えたのです  
耐える力など何処にあるでしょう、美しき人の要求<sup>もとめ</sup>に  
言わないで下さい、心の悲しみと同じだけ涙を流している、などと  
私の目には明らかなのです、河の借方貸方は<sup>28)</sup>  
天を見て思い出すのです、あの人のことを、アサドよ  
その非情さには、（我が）主君と同じ流儀があるのです<sup>29)</sup>

（9）

その時濡れた目のことが思い出されたのです  
心は嘆きへの激しい渴望を持つようになったのです<sup>30)</sup>  
一息もついていなかったのです、「終末の日」は未だ  
それなのに、あなたの出発の時のことが思い出されたのです<sup>31)</sup>

この願望<sup>ねがひ</sup>の単純さよ、即ち

また、あの魅惑の目のことが思い出されたのです

仕方が無かったのです、ああ、心の哀しみよ！

泣こうとしたら肝臓の事が思い出されたのです<sup>32)</sup>

人生がこのまま過ぎていってくれたなら

どうしてあなたの通る路のことが思い出されたのでしょうか

どんなにか門番と争いが起こることでしょう

あなたの家のことが天国でもし思い出されたなら<sup>33)</sup>

ああ、あの悲嘆への勇氣は何処

心に愛想を尽かし、肝臓のことを思い出したのです<sup>34)</sup>

再びあなたの街へと行くのです、(私の) 思いは

失った心のことが、多分、思い出されたのです

何と荒れ果てた所なのでしょう

荒野を見て家のことが思い出されたのです

私はマジュヌーンに、子供の頃、アサドよ

石を投げつけようとして自分の頭のことを思い出したのです<sup>35)</sup>

## (10)

遅刻したのには何か遅刻する理由があったのです

あなたは来ようとしていたのに、誰か手綱を押さえる人がいたのです

あなたのせいにするのは間違いなのです、この身の破滅を

それには少しは(私の) 運の良さも関わっていたのです

私のことを忘れてしまったのなら、教えましょうか

あなたの鞍の革帯に何か獲物が吊り下げてあったでしょう？

獄中にあっても思うのです、あなたを恋する狂人はあの(あなたの) 巻毛のことを

勿論、少しは鎖の重さの苦痛もあったのです

稲妻(恋人の姿)が目の前で一瞬光ったとしても何になるでしょう

口をきいてくれても良かったでしょうに、私は言葉をも渴望していたのです

ヨセフとあの人を呼び、一言も反論されなかったのは幸運でした

もし気を悪くしていたなら、私は罰に値したところだったのです<sup>36)</sup>

他の者(恋敵)を見てどうして心が安まらないことがあるでしょう

(恋の) 嘆きを訴えてはいても効果を求め続けていたのです<sup>37)</sup>

その行いには欠点はないのです、フェルハードを非難してはなりません



私と同じ恋狂いの中にこの若死にした男も含まれていたのです<sup>38)</sup>  
殺してもらおうとしたのに、側に来てくれなかった、それならば  
一体あの気紛れな人（恋人）の矢筒には一本の矢もなかったのでしょうか？<sup>39)</sup>  
逮捕されるのです、天使の記録に基づいて、不当にも  
私方の人間が誰かいたでしょうか、記録されている時に  
レクタ（ウルドゥー）の師はあなただけではありません、ガーリブよ  
人々は言っています、昔には、ミールとかいう人がいたのだ、と<sup>40)</sup>

(11)

恋の忍従を表す力は最早ないのです  
私にとって誇りであった心——その心は最早ないのです  
私は去るのです、人生の悲しみの傷を負い  
私は燃え尽きた蠟燭、宴に相応しくは最早ないのです  
死ぬための、心よ、別の方法を考えて欲しいのです、私には  
殺人者（恋人）の手にかかるだけの価値が最早ないのです  
六方<sup>せかい</sup>の顔の前に鏡の扉が開かれています  
そこでは不完全なものも完全なものも違いは最早ないのです  
<sup>ほど</sup>解いたのです、熱望は美の覆いの結び目を  
目を除いては今や何の邪魔物も最早ないのです  
生き長らえてきたのです、この世の無情の人質として  
しかし、あなたのことを忘れたことは決してなかったのです  
心から貞節の栽培への情熱が消えたのは、そこでは  
収穫されるのは収穫の悲しさでしか最早ないからなのです  
恋の苦しめを恐れはしません、しかし、アサドよ  
私にとって誇りであった心——その心は最早ないのです

(12)

あの妖精のような人の話、そして私の話し方のためなのです  
到頭恋敵となってしまったのです、私の親友だった者は  
あの人はどうしてあんなに飲むのでしょうか、他の人（恋敵）の宴席で、おお、神よ  
今日こそ思ったのでしょうか、自分を試してみようと  
見晴らし台を一段高い所に建てられたでしょうに

天空より上にあつたなら、ああ、もし私の家が  
 いくらでも辱めたら良いのです、私は笑いとばすことでしょう  
 何と私の知り合いだったのです、あの人の門番は  
 心の痛みを書き送りましょうか、一体何時まで、行つて見せましょうか  
 この傷ついた指を、この血の滴る筆を  
 擦れて消えてしまったでしょうに、あなたは不必要にも取り変えたのです  
 私の恥すべき平伏のために、自分の戸口の敷石を  
 告げ口したり出来ぬよう、仕立てたのです、恋敵を  
 友（恋人）に対する不満への、私は自分の同調者に  
 私は何処の賢者であつたでしょう、何の技能に秀でていたでしょう  
 何の理由もなく、ガーリブよ、天は私の敵となつたのです

(13)

水滴の喜びなのです、大海に滅し去ることは  
 苦しみが限度を超えることは、薬となることなのです<sup>41)</sup>  
 あなたから、私の運命には、文字合わせ錠のように  
 書かれていたのです、会う（合う）と同時に離れてしまうと  
 心は滅びてしまったのです、苦しみを癒そうと腕<sup>うで</sup>に  
 擦<sup>こす</sup>っている内に消えてしまったのです、この結び目を解くことそのものが  
 今や虐待からすら見放されてしまったのです、私達は、ああ  
 これ程までも忠節を誓う者達の敵となってしまうとは  
 衰弱の余り涙は嘆息と変貌し  
 私は確信したのです、水が風となることを  
 心からあなたの指<sup>へんす</sup>申花染料に染まった指の思い出が消え去ることは  
 生爪が肉から剥がれることに他ならないのです  
 私にとっては春の雲が雨を降らせて消えてゆくことなのです  
 泣き泣き別離の悲しみに死んでゆくことは  
 もし薔薇の香りにあなたの街へ行く気がないならば  
 どうして微風<sup>そよかぜ</sup>の走る道の塵となることがあるのでしょうか<sup>42)</sup>  
 あなたに明らかになるようにとの研磨への一念の不思議なのです  
 御覧なさい、雨季に鉄鏡<sup>かがみ</sup>が緑となるのを<sup>43)</sup>  
 生み出すのです、薔薇の輝きは観察への情熱を、ガーリブよ  
 目はどのような色の中でも開いていなければならないのです

(14)

この溜息には一生が必要なのです、効果を現すまでに  
誰が生きているでしょう、あなたの巻毛が征服されるまで  
一つ一つの波の網の中に百頭の鰐の口  
御覧なさい、水の滴がどのような目に会うのか、真珠となるまでに<sup>44)</sup>  
恋には忍耐が必要、そして願望は性急<sup>おがしい</sup>  
心をどうしておけば良いでしょう、肝臓が血と消えてしまうまで<sup>45)</sup>  
無関心を装ったりはなさらないと信じてはいるのです、でも  
土となってしまっているでしょう、私は、あなたに知らせが届くまでに  
太陽の輝きから学ぶのです、夜露は消滅の教えというものを  
私が生きておられるのもまた好意の一瞥が与えられるまで  
一瞬<sup>ひとまたたき</sup>以上のものではないのです、存在<sup>いのち</sup>の時間というものは、愚かな人達よ  
宴の熱気が続くのは火花が一踊りし終えるまで  
存在<sup>いのち</sup>の悲しみの、アサドよ、治療は死の他に何があるでしょう  
蠟燭は様々な色で燃え続けるのです、朝となるまで

(15)

全ての人ではなく、少しの人がチューリップやバラとなって現れたのです  
土の中には、どれ程美形がいることでしょう、隠れたままで<sup>46)</sup>  
思い出があったのです、私にもまた、色とりどりの宴席の  
しかし、今では忘却の棚の飾りとなってしまったのです  
天空の「葬列の娘達」（熊座の星）は昼はその姿を隠していたのに  
夜には心に何を思ったのか、姿を顕わにしたのです  
獄中の、父ヤコブは息子ヨセフの安否を知らなかったのに  
それでもその目は牢獄の壁の天窓となったのです<sup>47)</sup>  
私は全ての恋敵を不快に思うのに、エジプトの婦人達を  
ブライカーは快く思っているのです、「カナーンの月」ヨセフに魅せられたので<sup>48)</sup>  
血の河が目から流れ出るままにしておいて欲しいのです、別れの夜なのだから  
私はこう思うでしょう、蠟燭が二つ灯ったのだと  
あの妖精達に天国で私は復讐するでしょう  
神の御力であの者達が天女と、もし、あそこ（天国）でなったなら<sup>49)</sup>  
眠りは彼のもの、誇りは彼のもの、夜は彼のもの

あなたの髪の毛はその人の腕の上で千々に乱れたのです  
 私は花園に行ったのでしょうか、まるで学校が開かれたかのようなでした  
 夜鶯<sup>ブルブル</sup>達は私の嘆き声<sup>ガザル</sup>を聞き、恋歌詠みとなったのです<sup>50)</sup>  
 あの視線は何故、ああ、神よ、心を貫いてゆくのでしょう  
 我が不運のために、(あの人の)視線は睫毛となってしまったのです<sup>51)</sup>  
 押さえても胸の中に噴き上がってきたのです、次々と  
 私の溜息は引き裂かれた襟元の臍<sup>かが</sup>り糸となったのです<sup>52)</sup>  
 あそこ(恋人の所)まで行けたとしても、あの人の叱責の言葉にどう答えましょうか  
 頭にあった祝福の言葉は皆門番に使ってしまったのです<sup>53)</sup>  
 生命<sup>いのち</sup>を増すものなのです、酒というものは——酒杯<sup>さかずき</sup>を手にした人の  
 手の全ての線はまるで動脈のようになったのです  
 私は一神論者、私の信条は因習の廃棄  
 いくつもの宗団は消え去って初めて信仰の一部となったのです  
 悲しみに人が慣れてしまうと消えてしまうものなのです、悲しみは  
 困難は、私にあまりに多く降りかかり、容易なものとなったのです  
 このようにもし泣き続けたならば、ガーリブが、おお、世の人々よ  
 見ることになるでしょう、これらの町が廃墟となってしまうのを<sup>54)</sup>

(16)

心なのです、石や煉瓦ではなく、どうして痛まないことがあるでしょう  
 泣くでしょう、何度でも、「誰か」は私をどうして苦しめるのでしょうか  
 偶像寺院でもなく、カアバ神殿でもなく、戸口でもなく、玄関先でもなく  
 私が坐っているのは天下の公道、どうして他人は私をどかすことが出来るでしょう  
 あの心を輝かせる美は真昼の太陽のように  
 見る者の目を焼いてしまうのだから、どうして顔を隠すことなどあるでしょう  
 その眼差しの短剣は命を奪い、その嬌態<sup>しな</sup>の矢からは脱れる術がなく  
 あなた自身の顔の映像<sup>かげ</sup>ですら、どうしてあなたの前に来られるでしょう<sup>55)</sup>  
 人生の枷と悲しみの鎖とは、本来、二つとも同じもの  
 死ぬ前に人は悲しみからどうして解き放たれたりするでしょう  
 美貌と美貌の自信——そのために守られたのです、あの浮気者の名誉は  
 自分に自信があるのだから、どうしてあの者(浮気者)を試みたりするでしょう<sup>56)</sup>  
 あちらには誇りを守る心があり、こちらには流儀を重んじる心があり  
 路上で私はどうして会ったり出来るでしょう、宴席にあの人はどうして呼んでくれたりするで

しょう

その通りです、あの人は神を信じず、それに貞節でもないでしょう

信仰と心とを大切と思う人なら、どうしてあの人の街へ行ったりするでしょう

憐れなガーリブがいなくて困るようなことなどあるでしょうか

何をさめざめ泣くことがあるのです、「ああ」、「ああ」とどうして嘆くことがあるでしょう

(17)

誰かは誰かに心を与えてしまったのだから、どうして泣き声をあげたりするのでしょうか

心すら胸の中にないというのに、どうして口の中に舌があるのでしょうか<sup>57)</sup>

あの人がその気性を改めないのに、自分の流儀をどうして変えることがあるでしょう

頭を下げて尋ねられるのでしょうか、どうして私のことで頭にきているのか

あの親友は名を汚してくれたのです、燃えてしまえばよいのです、そのような愛などは

悲しみに耐えられないような人が、どうして私の秘密を知る友となれるのでしょうか<sup>58)</sup>

貞節とは如何なるものでしょう、恋心とは何処<sup>いずこ</sup>のものでしょう、この頭を砕くしかない今となつては

おお、石の心の者よ、どうしてあなたの門前の石でなければならぬことがあるのでしょうか<sup>59)</sup>  
鳥籠の中の私に、花園の様子を聞かせるのをためらわないで下さい、友よ

昨日雷が落ちた所がどうして私の巣であったりするのでしょうか

こう言えるのでしょうか、「私は（あなたの）心の中にはいない」などと、教えて下さい

心の中にはあなたしかいないのに どうして（私の）目から隠れているのでしょうか  
間違いなのです、（私の）心の引力を嘆くのは、御覧なさい、誰の罪であるのかを

もしあなたが身を引いたりしなければ、どうして引き合いが間に起きたりするのでしょうか  
この厄災（誘惑）は人の家を荒廃させるのに何の不足があるでしょう

あなたが友とした人は、どうして天を敵とすることがあるのでしょうか

これを「試すこと」と言うなら、「苦しめること」というのは一体何を言うのでしょうか

あなたは恋敵のものとなってしまったのに、どうして私を試みようとするのでしょうか

あなたは言ったのです、「どうしてあるのでしょうか、他の人に会うのに不名誉なことが」と

全くその通り、あなたの言う通り、もう一度言って下さい「一体どうしてあるのでしょうか」

目的を遂げようというのでしょうか、非難の言葉で、ガーリブよ

あなたが「薄情な人」と言うことで、どうしてあの人はあなたに情をかけてくれるようになる  
のでしょうか

註

- 1) 「画」は現世を指す。  
昔、イランでは、告訴人は紙製の衣服を纏っていた。
- 2) ファルハードは恋人シーリーンのために大変な苦勞をして山を穿ち、乳の河（浮白色に泡立つ河）を引いた、というイランの恋物語に基づく。
- 3) 「願望」とは恋人に殺害されたいという願い。ガザルの世界に於いては、恋人に殺害されることが恋する者にとって最大の幸福であるとされる。  
「刃」と「息」とは同一語 (dam) で、ここでは掛詞になっている。恋する者の恋心に絆<sup>はな</sup>されて殺人者（恋人）の剣の刃が恋する者を殺してやろうと外に出て来た、ということ。
- 4) 「足の下には火」じっとしておれないということ。  
恋人、或は神への恋のためにじっとしておれず、この世の鎖（束縛）など何の意味も持たない、ということ。
- 5) 自分の心を奪ったのはあなただということが分った、ということ。
- 6) 自分の心は敵（恋人）のものとなってしまったのもう信用することが出来ない。
- 7) 恋人の睫毛を針に譬えている。
- 8) 口に蘂をくわえるのは服従の印。  
葦からは葦笛が作られる。葦笛は悲嘆の旋律を奏でる。  
泣かないように、という恋人の命令に従おうと思ったのに、そのことが逆に泣き声を大きくしてしまった、ということ。
- 9) 「輝く糸杉」木に多くの灯りを点したものの。
- 10) 労働のために熱くなった農民の血の熱が雷と化し、収穫物を焼き払ってしまう。
- 11) 「仄かな笑い」他の男との逢瀬を喜ぶ笑い。或は、嫉妬するのを見ての笑い。
- 12) 鉄製の鏡を研いだ後に残る細い線を睫毛に譬えている。鏡の研ぎ跡もまた鏡という目の睫毛となって恋人の美を味わおうとした、ということ。
- 13) 恋人が手にする新月の形の剣で殺してもらえる喜びは、ラマザン（断食月）の終了を告げる新月を見る喜びと同じである、ということ。
- 14) 肝臓は勇氣、忍耐力の根源であるとされている。
- 15) ギラ (girah) は長さの単位。約2.5インチ。  
恋する者は、恋の苦しさの余り襟元を引き裂いてしまう。
- 16) 傷を掻きむしったりしないよう私の爪を切ったとしても、傷が塞がる前に爪が伸び、また傷を掻きむしるだろう。  
恋の狂気は治しようがない、ということ。
- 17) 恋人に殺してもらえる幸福を味わうために、剣がないから、とか、経帳子がないから殺せない、という言い訳をさせないために、初めから剣と経帳子を準備してゆく。
- 18) ガザルではよく恋人の巻毛を鎖に譬える。
- 19) アサドというのはガーリブの初期の雅号。獅子という意味。因に、ガーリブというのは、征服者、勝利者という意味の雅号。
- 20) 「半分の力で放った矢」恋人の半開きの目の睫毛のこと。恋人の夢うつつの目の魅力。
- 21) 石の中には火花が潜んでいると考えられていた。もし哀しみが火花のように石の中にあったとしたら、石の中から血がとめどなく流れ出たことだろう。哀しみというのはそれ程強烈なものであるということ。
- 22) 一刻一刻が死の苦しみで、死んだ方がましだったということ。
- 23) 死後、誰も葬列に加わろうとせず、墓を守ろうとする人もいなかった。
- 24) 私が恋心を訴えても、あなたは何も知らない振りをして「何なのですか」と言うだけで関心を向けてくれない。

- 25) 恋に酔い痴れているのだから、酌人が酒を酌いでくれなくてもかまわない。
- 26) 恋人の衣服の香りを我慢出来ないのだから、そよ風が恋人の衣服の香りを撒き散らしていても何の悲しみがあろう、ということだが、意味不明瞭な句。香りに我慢出来ないのは、恐らく、恋敵の香りが混じっているからであろう。
- 27) 春を色鮮やかなヘンナ染料に譬えている。ヘンナ染料は手足の飾りとして付けられるが、すぐに消えてしまう。
- 28) 心の悲しみと同じだけ泣いたとしたらこれだけでは済まない、ということ。
- 29) 天は人に災いをもたらすものと考えられている。
- 30) また昔のように恋に泣き、恋の嘆きに苦しんでみたいと思うようになった、ということ。
- 31) 恋人が立ち去った時の心の苦しみを「終末の日」の苦しみに譬えている。
- 32) 心の哀しみのために泣き続けたかったが、肝臓が引き裂けてしまいそうになったので泣くのをやめた。
- 33) 恋人の所へ行くために天国を抜け出ようとして争いになる。或は、天国より恋人の家の方が素晴らしいと言って争いになる。
- 34) 忍耐・勇気の根源である肝臓がまだ残っていたなら、好きなだけ嘆くことが出来たであろうに、ということ。
- 35) マジュヌーンはアラビアの恋物語の主人公で、美女ライラーを恋する余り、狂人となった。  
子供の頃マジュヌーンの頭に石を投げつけようとした時、将来、自分の頭に石がぶつけられるであろうことを感じた。即ち、自分もまたマジュヌーンと同様、恋の狂人となる運命であることを悟ったということ。
- 36) ヨセフは美男で有名。恋人はヨセフ以上に美しいのに、ヨセフのように美しいと言ったので、恋人は気を悪くしても当然だったということ。
- 37) 恋敵の嘆きは一向にその効果を現していなかったので、それを見て安心した。
- 38) フェルハードは有名なイランの恋物語の主人公。
- 39) 側にきて剣で殺してくれないなら、遠くから矢で射殺して欲しかった、ということ。
- 40) ミール・タキー・ミール（1722—1810）はウルドゥー・ガザルの巨匠。ミールの時代は既に過去のものであり、自分こそ現代の巨匠であるという、ガーリブの自信の程が窺える句。
- 41) 「薬となること」死んでしまうこと。
- 42) 薔薇の芳香ですら恋人の所へ行ってもその香りに染まりたいと思っている。
- 43) 研磨されたいとの一念によって鏡に錆がつき、鏡は思い通り研磨されることとなる。思い続けることの重要性。
- 44) 昔は水滴から真珠が出来ると考えられていた。
- 45) 心は物事を願う所であり、肝臓は忍耐するところである。
- 46) 土の中に葬られた多くの美しい人々の内、何人かがまた美しいチューリップやバラとなって現れてきた。
- 47) ヤコブは息子のヨセフが行方不明になったので悲嘆に暮れ、盲目（白い目）になってしまった、という物語に基づく。  
目が、ヨセフの投獄された牢獄の天窓になってしまう程息子のことを心配していた、といった程の意味。
- 48) 有名なヨセフの物語に基づく。  
ヨセフはエジプトで奴隷にさせられた。その主人の妻ズライカーはヨセフに恋するようになった。町の婦人達はそのことを批難していた。ズライカーは婦人達を食事に招待した。婦人達がナイフで果物を切ろうとした時、ズライカーはヨセフを中に呼び入れた。婦人達はヨセフの美しさに驚き、ナイフで手を切ってしまった。そしてズライカーがヨセフに恋してしまったのも当然であると納得した。
- 49) 天女は人の命令を何でもきかなければならない。
- 50) 夜鶯は恋する者の象徴。薔薇に恋していると考えられている。  
私の恋の嘆きに影響されて夜鶯も恋の歌を歌うようになった、ということ。
- 51) 睫毛のようにいつも下を向いていてこちらの方を真っ直ぐ見ようとしない。
- 52) 引き裂けた襟元は（恋の）狂人の印。

- 53) 恋人の家の門を開けさせるために知っている限りの祝福の言葉を門番に言っしまい、恋人に叱責されてもそれに答えるための祝福の言葉がもう残っていない、ということ。  
恋人に叱責の言葉を言われても祝福の言葉で応じるのが恋する者の務めである、というのがこの詩句の趣旨。門番に使った言葉を恋人に使う訳にはいかないのである。
- 54) ガーリブの涙の洪水で町が廃墟となってしまう、ということ。
- 55) 鏡を見ようとする恋人に向かって言っている。
- 56) あの人、自分は美しいのだから誰でも自分を恋するようになると思っているので、浮気者のあの恋敵も本当に恋をしているのだと思い込み、試してみようとしなかった、という意味。
- 57) 自ら心を与えてしまったのだから、恋する者は不平を言ったりしてはならない、という意味。
- 58) 親友はガーリブから恋の悲しみを聞き、その悲しみに耐えられず他の人に話してしまった。「愛」は「友情」とも「恋愛」とも解釈できる。
- 59) 自分の貞節の心や恋の心を受け容れてくれないなら、お前の門の前の石に頭をぶつけて死ぬ義理はない、ということ。